

半七さんとびよえもん

「博物館だより」のうち

川村優理



「つぎは、わしの家に来てちゅれませー」  
ねこまたのお話を雑誌に載せてから一か月  
経った九月五日。山岡まりさんは、唐橋通り  
で、大きな黄色いひよこと出会いました。ひ  
よこといっても人間の大人の二倍ほどの背丈  
です。からだはふっくら黄色い羽毛でおおわ  
れていて、巨大に見えます。ひよこがにんま  
り笑うのを、初めて見ました。  
ひよこのくちばしは器用に動いて、いかに  
も話好きなひよこのようなです。  
「わしは、ひよえもんと、いひます。いひま  
す。ひよえ。言つてちゅれませー」  
これからひよえと呼んでくれと言おうに、  
ひよえはまりさんの顔をのぞきこみ、目をば  
ちくりさせました。  
その日。近づいてくる台風のせいか、夕暮  
れの空はピンクにくもっていて、まりさんは、  
珍しい空の色を写真に撮ろうと、ちよどカ  
メラをもって歩いていましたので、くもった  
ピンクの空を背景にして、きいろいアドバル

ーンのように丸いびよえの写真を撮りました。  
「では、案内をもうしませう。いや、もうし  
ましよう。」  
の発音が混じりましたが、たぶん、とても緊  
張しているからなのでしよう。江戸時代の書  
きことばで話しているのか、話したことばで話  
をするのか、びよえにはよくわかっていない  
ようでした。  
このひよこは文字を書く仕事をしているの  
のかなと、まりさんは思いました。  
びよえの連れて行ってくれたのは、唐橋通  
りの西の端にあるかぶと屋でした。  
階段を上り、古びた木戸を開けました。  
「こちらへどうぞ。」  
木戸に続く石だたみを歩き、玄関の戸口を  
くぐると、すぐ右手に内蔵があります。左手  
には帳場の置かれた店の間があります。

「古着。反物。鉄砲。弾薬。かぶとを売り  
もす」  
びよえの声に気が付いて、蔵の中で整理を  
していた人が、ふと顔を上げました。ちよん  
まげを結び、しぶい茶色の着物を着たほっそ  
りした男の人です。  
「びよえもんさん、おかえり。お店のみんな  
は、だんなさまと川に出かけましたよ。鮎を  
つつて食べるのだそうです。なんならばびよえ  
もんさんも、ちよつと川に行ってくれば。」  
びよえは男の人のことを手短かに紹介しま  
した。  
「こちらは、半七はん。お店の番頭さん。お  
客さんは、山岡さん。三百年ほど先の人。」  
店の土間に座り直しました。  
「山岡まりといいます。さつき唐橋通りでび  
よえさんに出会って、連れて来てもらいまし  
た。ここは、たぶん、元禄時代かな。」  
びよえは、奥の台所から、しずしずと、ゆ

のみものつたお盆をもつて出てきました。  
「お湯でもどうぞ。」  
まりさんは、土間の上がり口にこしかけ、  
ぴよえの入れてくれたお湯をゆっくりに飲みま  
した。  
半七さんが言いました。  
「ぴよえさんは、この家の守り神さん。わた  
しとお店のことを心配してくれております。  
さつき、もう一人、お客さまを連れてきてく  
れましたよ。」  
土間に、青に白い「B」の文字の入ったス  
ニーカーが脱いであります。どこかで見た  
ことがある靴です。そこに、  
「半七さん。これ、真田公のかぶとではない  
だろうか。」  
唐橋通り設計担当の森本さんが、鹿の角の  
かぶとをもつて、のそりと蔵から出て来まし  
た。  
「おやおや、山岡さんも来たの。こちらの半  
七さんは、あの有名な紅屋（くれないや）半

七さんなんだって。さつき、聞いたんだけ  
どね。」  
紅屋半七さんといえば、人形浄瑠璃の主人  
公にもなっている人です。唐橋通りの生れと  
聞いていました。が、まさか、こんなところで  
本人に出会えるとは思ってもみませんでした。  
「あ、でも……」  
「まりさんは、たいせつなことを思い出しま  
した。」  
半七さんは、奥から何本か反物を出してき  
て、まりさんにくるくると広げて見せました。  
どの反物も、さつきまりさんが写真に写し  
たような、夕焼けの色です。  
「ほしいなあ。でも私のもっているお金と、  
半七さんの使っておられるお金とは、違  
うの  
です。」  
まりさんは、さいふから一万円札を出して、  
半七さんとぴよえに見せました。  
「こりやまた。これが、お金ですかいな。」  
「そうです。私の仕事は学芸員と違って、古

い物の整理や調査をすることです。唐橋通り  
の江戸時代について調べているので、ぴよ  
りが私を見つけたのかもかもしれません  
えが森本さんは、さつき蔵で見つけたかぶとが  
森本さんに入ったようですよ。  
「これ、三百年先まで、もって帰りたいなあ  
「さしあげますよ。どうぞこの店のかぶとは  
大坂の陣の戦場で拾ってきたものや。」  
半七さんが、あっさりと言ったので、聞い  
ていたぴよえが、のんでいたお湯をのどにつ  
まらせました。  
「半七さん。勝手にあげたら、だんなさんに  
しかられるよ。」  
唐橋通りは、川にそって東西に伸びるおよ  
そ90メートルの長さの道です。西に行く  
に従って高くなり、ほとんど西の端っこに立  
っているかぶと屋は、そこに石組みを作った  
上に大きな意を建ててあるので、川と唐橋通  
りをすっかり見下ろすことができました。  
半七さんの話によれば、半七さんは、この

かぶと屋に、七歳のときにもらわれてきま  
した。半七さんの実のお父さんは、同じ唐橋通り  
の、ちようど真ん中にある紅屋で、木綿と染  
め物の商いをしていた。染め物が大好きな職人で、白い木綿の生地  
を、夕焼けのような紅の色に染め、「紅屋」  
と呼ばれるようになりました。半七さんは、紅屋をついで、もっと染め物  
をやりましたかったのですが、職人かたぎのお父  
さんは紅の色を出すために財産をつぎこんで  
しまい、紅屋の商いが続けられなくなつたの  
で、かぶと屋の養子になつたというわけです。  
かぶと屋のご主人には、子どもがなく、働  
き者の半七さんをもらつて家も繁盛したので、  
お嫁さんをもらつて、店をもつと大きくしよ  
うという話が進められていました。そ  
それで、ぴよえは、困つていました。半七  
「半七さんは、ほかには好きな女の人がおりも  
す。けど、だんなさんには、自分の決めた嫁を



もらえと言います。どうか、助けてちゅれませー

まりさんは、町に残されている半七さんの物語を知っています。

たしか半七さんは、この家から逃げ、恋人と大坂で一緒に死ぬのです。

江戸時代。家の主人の命令にそむいて、好きな人を嫁にすることは、絶対許されませんでした。たとえ恋人と一緒にどこかへ逃げたとしても、かならずつかまえられてしまいました。その後、きっとひどい罰を受けるでしょう。半七さんが、恋人と死んでしまおうとしたのは、その当時、無理のないことだったのです。

「ぴよえ。私は、この家の蔵から半七さんのかきおきと、お調べ書きを見つけたことがあ

る。大坂に出た半七さんは、かぶと屋の主人あてに、かきおきを残して、恋人と死んだようですよ。でも、そんなことをさせてはいけません。」

「読んだ」

「：と、ちよつと待って。書き置きとお調べ

書きだけ残しておいて、半七さんと恋人をち

がう時代に連れてってあげられないかな」

「それは、できん」

「そめた反物を、手に

持ちました。

空を染めていたピンクの色はどんどんうす

れ、そのまま反物を染めたように見えます。

しだいに、半七さんと江戸時代のかぶと屋

の風景が遠ざかり、代りに、現代のかぶと屋

に変わっていきました。

と、そこに、大きなバッグをかついでジーン

ズをはいた若い男の人と女の人が入ってきてま

した。

「紅染めを、再現しようと思ってる者ですが」

「まりさんは、あわてて、男の人に頭をさげま

した。

「美術大学の先生が、江戸時代の紅染めを再

現しようと言っておられると聞きました。」  
「美大で染色を教えている石田といいます。」  
こちらには、助手の佐藤あかねです。」  
「まりさんは、びよえがにんまり笑ったこと  
に気が付きました。」  
美大の二人に、びよえは見えているのかし  
ら？  
「いつもどうもです。」  
「びよえは、二人が話しかけてくれたことが  
嬉しくて、お客さまたちに出す「お湯」を用  
意しに、かまどに行きました。」  
唐橋通りに出ました。街にオレンジ色の明か  
りが灯つています。」  
「そうだ。真田のかぶと。あれ？どこへ置い  
てきたかな。」  
森本さんの前に、鹿の角のかぶとを頭に載  
せたびよえが、またにんまりと笑って立って  
いました。」  
半七さんの一件は、たぶん、うまくいった

の  
だ  
ろ  
う  
と  
ま  
り  
さ  
ん  
は  
思  
い  
ま  
し  
た  
。  
と  
二  
人  
は  
、  
逃  
げ  
出  
す  
こ  
と  
が  
で  
き  
た  
の  
で  
す  
。  
か  
き  
お  
き  
と  
お  
調  
べ  
書  
き  
だ  
け  
を  
残  
し  
て  
、  
き  
つ